

## 学習文法におけるデザインと身体的重要性

柳瀬陽介 (広島大学)

### 0 はじめに

#### 0.1 講演者の話から

- ・歴史的な分析：学習英文法は自己目的化され、理論的解明のないまま放置
- ・理論的な分析：学習英文法は英語を体得させるための道具
- ・結論：学習英文法は再構築されなければならない

#### 0.2 指定討論者の話から

- ・分かりやすく、力がつく文法指導とは？
- ・英文法の「全体像」「体系」とは？「フィーリング」や「イメージ」とは？

### 1 学習文法は伝統文法や科学文法とどう異なるか

#### 1.1 伝統文法 (traditional grammar)

- ・対象：人間の外で観察される言語事実
- ・目的：できるだけ多くの事実を体系的に記述（記述的妥当性）
- ・媒体：非日常的な文法用語。読み手の知性・解釈に負担をかける言語。

#### 1.2 科学文法 (generative grammar)

- ・対象：人間の内側で獲得される言語
  - ・目的：獲得される心内の言語についての説明的仮説を提示する（説明的妥当性）
  - ・媒体：人工的な理論言語（および表象）。理論言語の習得に時間がかかる。
- ⇒「全体像」「体系」は伝統文法や科学文法が観察した諸知見を、さらに見渡して（＝二次的観察をして）得られる。しかし英語教育の第一目的とは、英語の体得。

#### 1.3 学習文法 (pedagogical grammar)

- ・対象：学習者が習得しようとするレベルでの外的な言語事実、およびその習得を助けると考えられる内的な「イメージ」や「フィーリング」
  - ・目的：学習者が目標とするレベルに応じて、学習者が学習文法の理解・活用にかける労力に適した習得効果が出す（教育的妥当性）。学習文法は外国語習得というより大きな目的のための手段・道具に過ぎない。
  - ・媒体：日常的な自然言語およびわかりやすい視覚情報。
- ⇒学習文法の自己目的化とは、学習文法がその本来の目的から離れ、伝統文法（あるいは科学文法）へ近づいてしまうこと。
- ⇒学習文法は伝統文法から派生的に分化したがその分化は不十分。学習文法は、人工物としてデザインされるべき。（学習文法は自然の鏡ではなく、第二の自然を創るための人工的触媒）

### 2 「フィーリング」や「イメージ」の神経科学的解釈

主要参考文献： Damasio (2010) *Self Comes to Mind*. Pantheon

#### 2.1 各種概念の理論的定義

- ・Nonconscious mind（非意識的認知）
  - ・Disposition（傾向性・傾性）：暗黙的な定型的行動。
  - ・Emotion（情動）：外部からの刺激が、内部からの反応を引き起こして自動的

に生じる身体内部の motion (動き)

- ・ Conscious mind (意識的認知) / Self (自己)
  - ・ Self-reference (自己言及) : recursion や reentry と同様に、あることが自ら自身に働きかけること。
  - ・ Autopoiesis (オートポイエーシス) : 自己再生産の中でも自己言及性が強いもの
  - ・ Image (イメージ) : disposition (傾向性・傾性) の自己言及的自覚 (操作可能)
  - ・ Feeling (感情) : emotion (情動) の自己言及的自覚
- (1) Protoself (原自己) : primordial feeling (原初的感情) だけの自己
- (2) Core self (中核自己) : image, feeling などに基づく agency (行為主体性) を有する自己
- (3) Autobiographical self (自伝的自己) : 言語によって過去・未来に延長された identity (自己同一性) を有する自己
- ⇒ 「フィーリング」や「イメージ」とは、神経科学的解釈と無関係・真反対などということはない。
- ⇒ 自己言及的自己再生産 (=オートポイエーシス)。 予めの身体的情動・行動があつてはじめて感じられる。

## 2.2 第二言語学習者の発達段階

- (1) Protoself as a newborn
  - (2) Core self as a pre-linguistic child
  - (3) L1 autobiographical self (= L1 self)
  - (4) L1 self with L2 protoself
  - (5) L1 self with L2 core self
  - (6) L1 self with L2 autobiographical self
- ⇒ 「フィーリング」や「イメージ」は(4)から(5)、(5)から(6)への移行を助ける。

## 2.3 学習文法が役立つ条件

- ・ L1 self の日本語とあまりに疎遠な非日常的文法用語は自己言及的自己再生産を促進しない。
- ・ L2 self の身体的情動経験がほとんどない場合、「フィーリング」や「イメージ」は我が身には感じられない。
- ⇒ 英語的体がある程度できていない者には、学習文法の「フィーリング」や「イメージ」は感じられにくい。
- ⇒ 逆に言うなら、英語的体ができている者には、「フィーリング」や「イメージ」は「目から鱗が落ちたような」鮮明な自己感覚をもたらす。
- ⇒ 身体的経験は、基本的に常に意識に先行する。意識は身体的経験を部分的に補助することしかできない。

## 3 学習英文法の具体的な再構築

- 3.1 英語習得のための人工的触媒としてデザイン
- 3.2 英語での身体的情動経験を先行させる指導 (英文法書だけでは完結しない)
- 3.3 日本語自己をどのように活用するか (今回は未検討)

ダウンロードなどは <http://yanaseyosuke.blogspot.com/>

関連記事は <http://yosukeyanase.blogspot.com/>

問い合わせなどは [yosuke@hiroshima-u.ac.jp](mailto:yosuke@hiroshima-u.ac.jp)